

ギリギリのところが一番おもしろい

記録：佐藤琢磨

編集校正：関礼子、谷内久美子

聞き取り場所：新潟県立環境と人間のふれあい館

日付：2018年9月1日

【波多野孝さん】

1955（昭和30）年生まれ。阿賀野市（旧安田町）出身。立命館大学出身。大学在学中に深井純一ゼミ（地域開発論）において、新潟水俣病に関する卒論を執筆。大学卒業後、小学校教員として勤務。新潟水俣病教師用指導資料集の作成に関わる。早期退職し、現在はあがのがわ環境学舎において勤務。



地元新潟のこと

阿賀野川は中流域の阿賀のお地藏さんがいる旧安田町、私はそこで生まれ育ちました。現在阿賀野市です。五頭山や福島潟の春の菜の花はとても綺麗です。白鳥が飛来する瓢湖には八重桜が咲き、冬になると瓢湖の白鳥が田んぼで落ち穂をついばむ様子も見られます。冬は雪が腰あたりまで積もります。雪の少ない年の1月か2月の朝でそれぐらいです。道路の真ん中には地下水をくみ上げて雪を溶かす消雪パイプがあって、雪が降り始めると、ちょろちょろ水が出始めます。うちも深さ40mぐらいの井戸を掘って、水が出るようにしてあります。浅い地下水だとすぐ枯れるので、その下の地下水まで掘ると40mになるんですよ。1m掘るのに1万円という話なので、個々の家で掘るのは大変なんですけど、それがないと雪かきなど全部人力でやらないといけないので、年を取ると難儀なんですよ。新潟の雪は重いですから。ひとかたまりの雪でも重いんですよ。

家族で同窓会ができる

35年間、新潟で小学校の教員をやってきました。なんで新潟水俣病に取り組んだかという、長い話になります。きっかけは大学生の頃です。今日はあえて大学のTシャツを着てきたんですけど、京都の立命館大学を卒業しているんです。もう40年以上前になります。なんで関西を選んだか。東京が嫌だったっていうのがありました。人がたくさんいるスクランブル交差点というのが東京に出来た頃です。パーと人が来るじゃないですか。あれはテレビで見ているのも怖かったんです。「東京はちょっとなぁ」と思いました。新潟から東京の私立大学に行くのが一番近いし、それが普通だったんですが、私はやっぱり変わっていたのでしょうかね。

でも、立命館を選んだ一番の理由は学費でした。立命館っていうのはその当時、全国で1番授業料が安い私立大学でした。今とは物価は違いますが、当時で入学金が10万円、年間の授業料が9万円だったので、初年度に払うのが19万円だったんですね。入学金は分割できなかったのですが、授業料は四分割にできました。

授業料が日本一安い大学だったので、まず姉が立命館に入ったんです。私もどこの大学にするかって考えたときに、東京の法政とか明治クラスの大学になると、もう初年度に収める学費が40万円ぐらいかかったんです。京都の同志社や関西学院大学も40万円ぐらいでした。それは無理だろう。結果、残ったのが立命館しかなかったという話です。

私が入った直後に授業料が上がりましたが、入学したら周りは貧乏人ばかりでした。国立大学の滑り止めで立命館に志願した学生が多くいました。1年のクラスも周りはみんな国立大落ちて、一浪しているような連中ばかりだったんです。「もう二浪できないし、親も許さんから、とりあえず立命館に来たんだ」みたいなおぼっかりです。途中で何人もやめて行きましたけど。でも新潟から関西に行くのは珍しかったんです。私も、たまたまですが、関西のお笑いの文化圏というのが肌に合ったから、関西に行つてすごくよかったです。

うちの姉のつれあいも立命館大学の卒業生なんです。それで姉の子どもも立命館に入りました。私も立命館でしょ、

家族が揃うと立命館の同窓会ができます。

深井純一教授との出会い

公害関係の勉強をするために行ったわけでも、教員になるために入ったわけでもありません。東京の大学が嫌だったというのと、音楽関係で関西に興味があって、京都あたりの大学で4年間過ごせばいいだろうと考えていたんです。

3回生でゼミを選ぶときに、私が選んだのが深井純一先生⁶³です。深井先生は地域開発論という講座を持っていました。先生は、東京大学の農学部出身でした。1960（昭和35）年の安保闘争のときに、安田講堂に入ったかどうかまでは知らないんですけど、全共闘で東大で闘争をやっていたバリバリの闘士だったんです。なんでその人が大学の先生になったかという、他に働き口がなかったということらしいです。当時の立命館は革新系の大学で、学生も教授陣もすごい大学だったらしいです。私が入るころには学園闘争は終わりのほうに近づいていたので実感はありませんでした。ゼミを選んだころ、新潟と熊本の水俣病運動が盛り上がっていた時期で、先生も現地に出入りしていました。先生は私に「新潟出身だったら水俣病やらなきゃだめだろ」という話をされて、目的意識も問題意識もなく水俣病にかかわり始めたのが当時の私で、気がついたら40年以上経っていたということです。

深井先生のゼミは調査主体だったので、いろんな所で調査をしていました。先生は誰も発掘していないような資料を集め、それをもとにいろんな論文を書いたり、調査したりする先生だったんです。当時、昭和電工の極秘資料というのが横浜のどこか倉庫の一角にあったらしいんですよ。それを聞きつけて、昭電の社員にその倉庫の鍵を借りたそうです。すごいでしょう。今、そんなのバレたら一発でクビでしょ。そして、週末には横浜に来て、その倉庫で極秘資料を何ヶ月もかけて全部コピーしたらしいんですよ。といっても、コピーをしに行くのはゼミの卒業生でした。女性だったんですけど、車を持っているから、コピーの仕事をさせた。コピーはダンボール7～8個分ぐらいになったらしいんですよ。鍵を貸した社員は、後でそれがばれて、左遷させられたそうです。そういうことをやって、膨大な資料を集めて、1冊の本にしました。それで博士号を取りました。

そして、なぜか本を書くのに使った資料が、全部、私のところにあるんですよ。要するに昭電からコピーしてきたその現物があるんです。一度論文で全部使っちゃってるので、もう極秘でもなんでもなくなってますが。

ただそこに、なぜか当時の県の衛生部長さん⁶⁴が持っていた、私的な資料まで入ってるんです。要するに、「寿命もいくばくもないから俺の資料を預かってくれ」みたいな感じで、深井先生の所に衛生部長の資料が行ったらしいんですよ。それは1級品の資料ですよ。その衛生部長さんが厚生省「新潟水俣病事件特別研究班」のメンバーになっていて、委員同士のなかで部長さんは手紙のやりとりをしてるんですね。その手紙の現物まであるんですよ。それを読むと委員同士で意見が分かれていて、この人の意見とこの人の意見が違って、そこに賛成する、反対するとかありました。またその委員の人の力関係のやり取りで、あの人の意見に従わない方がいいとか、あの人に言ってることは無茶苦茶だとかそんなやり取りが手紙に書いてあったんですよ。その手紙を全部私はワープロに打って記録にとってあるんですけど、それは出せないですよ。宇井純⁶⁵さんの手紙も何通かあるんですよ。それも出せないですよ。私のうちにあります。

教授にその資料をどうするかって聞いた時に、自分はもうその資料を使ったから、私に預けるか、環境と人間のふれあい館に寄付するか、どっちがいいかという相談を電話でもらったんですよ。その時に、「いや先生ね、ふれあい館にはまだいっぱい未整理の資料もあるし、それを持っていくと先生の大事な資料ってのはもう表に出ませんよ。私のところによこせばなんとか表に出る場面があると思います」と言いました。すると「うん。わかった、じゃあ着払いで送るよ」って。それでダンボールが10数箱も届いて、何万円も払いましたけど。結局家に入りきらず、あがのがわ環境学舎に預けてあるんですけど。

ほとんどいらない資料だし、青焼きなんですよ。それは何年か経つと文字が消えるんですよ。そういうのまでいっ

63 1964（昭和39）年東京大学農学部を卒業後、同大学大学院農学系研究科で農業経済学の研究を経て、1970（昭和45）年4月立命館大学産業社会学部助教授として赴任。その後35年間教鞭を取った。著書に『水俣病の政治経済学：産業史的背景と行政責任』。2012（平成24）年に肺炎で他界。

64 当時の衛生部長は、北野博一であり宇井純との手紙のやりとりを受けて水質調査の対応に動いた人物。

65 宇井純（1932-2006年）は、東京大学の応用化学を学んだ後、工場の現場で働き、大学院に進学した後、1965（昭和40）年から同大学の都市工学科で助手を務めていた。その時に、工場排水処理の専門家として、熊本と新潟に生じた水俣病について研究を始めた人物。沖縄大学名誉教授。

ばい送られて、読めないような資料もいっぱいあるんで、そういうのは思い切って捨てました。だって見えないし、何が何か分かんないから。

教員になったわけ

教員になったのも、大学時代に新潟水俣病に取り組むという自覚がうまれたわけでもなく、吹奏楽をやっていたから、中学校で吹奏楽の指導をしようという、それだけの理由でした。でも、当時、中学校の教員は採用が少なく、とりあえず小学校に入れば、いつか中学校の教員になれるだろうと思って小学校の教員になりました。でも、小学校の教員で新潟水俣病を大学でやってきた人間は皆無なんですよ。実際に教員になって新潟に帰ってきても、教育現場で新潟水俣病に関して実践が進んでいたかという、ほとんどなくて、教科書に四大公害裁判の話が載るようになってきたころでした。だいたい教科書に載るのは、問題が終わってからじゃないですか。だから第一次訴訟が終わったあたりから教科書にでたのかな。最初は紙面の2～3ページかそれくらいを割いていたんですが、そのうちに四大公害病に関しては5年生の社会科の教科書には1ページか2ページしか載らなくなってしまいました。「あら、困ったな」というところから私の実践が始まっていくんです。

これまでの活動を振り返って

1995（平成7）年は水俣病問題が政治解決した年です⁶⁶。その頃まででどんな動きがあったかと言うと、一次訴訟がありましたが、そのあいだ新潟の教育現場では全く水俣病の「み」の字も表立っては出てこないんですね。その当時同じ旧安田町の旗野秀人さんが民間レベルで『阿賀に生きる』という映画を作ったり、お地蔵さんを作ったりしていた頃です。政治解決の後になると、若干、学校現場が変わってきます。所々で小学校・中学校の実践が耳に入ってくるようになりました。でもそれは計画的な実践ではなく、いわゆる単発的な実践でした。旗野秀人さんを講師に迎えて、『阿賀に生きる』の映画を上映して、そこに認定されなかった患者さん達も同行して、授業を展開するという形で行われていました。そういうことをテレビや新聞が報道し、「やってるんだな」ということを後で知るわけです。

政治解決以後、ふれあい館が2001（平成13）年に開館したのも大きな変化でした。この辺から学校現場でも単発的じゃなくて計画的に取り組もうという動きがはじめてきました。しかし、県の教育委員会は動きませんでした。そんななか、1992（平成4）年から自分自身で新潟水俣病の教育実践をやり始めました。計画的に授業カリキュラムを組んで何時間構成か、指導計画のねらいは何かをきちんと立ててやっていました。それをやらないと、授業する側が揺れ動いてしまうので。大事にしたのが指導計画の目標で、そのなかに「人々の努力・人々の心情など」が入れてあったんですね。いま新潟県の水俣病に関わる教育現場の実践は、人権教育を中心に展開されているんです。「病気に苦しむ人々の心情に迫る」というのは道徳的な領域になってきます。人権問題に重点を置いて指導しなさいというのが中心です。「公害の正しい知識理解、それから人々の心情、それから未来に向けて」ということは当時の指導計画には入れてありました。これからの取り組み方、特に子ども達でするので、自分の身の回りで自分にやれることは何かということを考えさせることで、広がりを持たせようと、このような目標を立てました。

しかし、これも実は単発なんですよ。私の個人の考えで、誰にも相談せずに授業でやりはじめたので。内緒にしてやってもやっぱり周りに知られるわけです。水俣病を授業でやれなんて県の教育委員会も言っていないし、教科書に載っている内容で普通は指導しますよね。教科書にも載ってないことをやっていると、校長室に呼ばれるんですよ。「あなたはこういう授業やっているみたいなんだけど、どうなのか」と。どうなのかと言われても「ここは新潟県だし、新潟水俣病もやらなきゃいけないんじゃないですかね」みたいな感じで軽くごまかして、やりはじめたんですよ。風当たりは強くて、やりにくいと感じたんですけど。

でも何で新潟にいて、教科書に載っているからと言って、例えば北九州の大気汚染とか遠くの問題をやらなきゃいけないのかって、普通、疑問に思いますよね。新潟の子に聞いたって「新潟水俣病なんて知らない」って言うでしょ。

66 1995（平成7）年12月、新潟水俣病被害者会・新潟水俣病共闘会議と昭和電工が、解決協定を結ぶ。政府が、「水俣病対策について」を決定し、内閣総理大臣が水俣病問題の解決に当たっての談話を発表する。

水俣病問題の解決に当たっての村山内閣総理大臣の談話

<http://worldjpn.grips.ac.jp/documents/texts/exdpm/19951215.S1J.html>

67 第1次訴訟は1967-71年、第二次訴訟は1982-1996年。

これってちょっとおかしい。ましてや阿賀野川流域に学校があって、毎日その水を飲んでるのに、知らないっていうのはおかしい。そう思って授業で新潟水俣病に取り組み続けきてきたんですね。

どれだけ頑張っても現場は動かなかった

やっと明るい兆しが見えたのが、泉田裕彦知事の時代です。泉田知事は、水俣病に関して熱心な知事だったんですよね。次から次へときっかけを作ってくれました。2005（平成 17）年に発表された「ふるさとの環境づくり宣言」のなかの 4 項目目に教育についての項目が書かれた。2007（平成 19）年にフィールドミュージアム事業というのが始まって、2008（平成 20）年に新潟水俣病問題に係る懇談会を知事が作ったんです。その時に委員になりました。

懇談会では教育部会もでき、誰でも新潟水俣病の授業に取り組めるような、指導の手がかりになるものが欲しいよねという話をして、指導資料集⁶⁸というのを作り上げました。新潟水俣病はなかなか難しい指導内容なので、どうすればいいか困った時に指導資料集を見れば、新潟水俣病についてあまり知らなくても、一定水準の授業ができるような指導案にしようということになりました。実際に作る前に、現場の教員が授業を行なって、我々がみんな見に行つて、協議会を開いて、指導の流れはここは良くないとか、この発問が良くなかったとか、あの板書はもっとこうしたほうがよかったというように全部、吟味して作った指導書なんです。机上で作ったわけではなくて、実際に授業やって、見てもらってと 2 年をかけて作りました。

なかなか教科に位置づけられないので、小学校 3 年生から 6 年生を対象にした指導案、そして中学 1、2、3 年生は道徳領域として指導案を作り、5 年生に関しては社会科の中に公害単元がありますので、教科という形で水俣病を取り上げる指導案をつくりました。でも、指導書だけじゃだめだろうということで、旗野秀人さんが作ったお地蔵さんの絵本と指導書を教室におきましょうという話になりました。それが今から 7、8 年前です。すごくいい流れになってるのですが、これは建前で実際は違うんですよ。作った方は自己満足で、これで現場は授業に取り組んでくれるだろうと思うんですけど、ところが現場はそんなもんじゃない。私はもう退職して 5 年になりますけど、現場の声を時々聞くと「え、そうなの」という感じで、あんまり動いてないというのが分かります。

新潟県から時々教職員向けに、学校向けに指導書ができたから指導計画の中に入れて指導してください、というお願いのお便りを出してくれて言ったんですね。当時の県教委はお便りを出してくれました。私の簡単な指導案を、このようにして指導できるんですよっていう事例を県のホームページに載せてくれたんですね。お膳立てをよくしていただいて出発しました。実際にこの指導書をもとに、指導計画の中に新潟水俣病という単元を入れて指導計画を作ってくれた学校が新潟県の大体の 5 割以上という話を聞きました。「もう 5 割も入れたの!？」と驚きました。問題はその後ですね、ある学校で指導計画を見せてもらったら、入ってないんですよ。教科書に載ってる北九州の大気汚染が入っていて、新潟水俣病が全然入っていません。お地蔵さんの絵本が教室にあるかなと思って探してみると、それもあります。うちの姉がまだ中学校の教員をしていたので、姉に聞いたら「そんな文書は見たこともない」と言うんですね。でも県教委は「5 割以上が指導計画に位置付けました。最近ではもう 8 割ぐらいに入ってます」と言うんですよ。でも、現場ではやられていないというのが実際なんですよ。やらないとかやれないとかどっちなのか分かんないですけどね。確かに、小学校の先生はいろいろな教科を教えなければいけないし、忙しい。私も現場にいたので分かります。積極的にやれとは言えないけども、県の義務教育課がこれをやれて言ってるんですから多少は学校も考えて欲しいし、管理職も働きかけるべきだと思います。

「県教育委員会の方針に逆らうわけですから」と私も高飛車に言ってみたわけですけど、実際はやらない、やれないというのが現状です。その後、おとしに教員指導集の第 2 弾が出たんですね。第 1 弾では入ってなかった中学校の社会科の単元が入ってるというのが特徴です。拉致問題と新潟水俣病は、新潟県固有の人権問題です。今回の指導集は新潟県に加えて新潟市も共同で作りました。作る方は頑張つて作ってるんですけど、現場はいくら作つても変わらないという非常に不思議な現象が起きています。

まずやってみる、それが現場では大事

小学校の教員でこういうことをしているのは、あまりいません。私が大学時代に水俣病について研究して、たまた

68 県知事の任期は 2004（平成 16）年から 2016（平成 28）年まで。

69 正式名称は「新潟水俣病教師用指導資料集」<http://www.pref.niigata.lg.jp/seikatueisei/1270249212822.html>

ま小学校の教員になったから。普通は中学校とか高校の先生が専門性を生かしてやるもんです。でも、新潟水俣病という公害なんていうものは、あんまり人がやりたがらないし、面倒くさいし、おまけにいまだに裁判が継続中なので、そんなのを取り入れようと思うと、学校現場だといろんなところで問題になります。授業の仕方によっては、またいろいろと問題が出てきます。だから学校では、例えば何か節目がないとおっかながって授業をしない。二次訴訟の後の政治解決で、和解して区切りがついたって報道されるじゃないですか。そうすると「終わったんだな」と周りは錯覚するわけですよ。そうすると現場が動き始める。「じゃあ、水俣病の授業やってみようかな、やらないといけななんだな」みたいな。そういう人が出始める。でも、現場でそれを先んじてやろうとすると、「出る杭は打たれる」みたいなことはあります。

阿賀町では昭和電工と関連の深かったじいちゃんばあちゃんとかが生きてる。そういう学校で、新潟水俣病を題材にした授業が展開できるかと言うと、教職員は二の足を踏みます。県にやれと言われても、やっぱり地元に入ると、「昭和電工はおじいちゃんの勤めていた会社で原因企業だ」という話も出てくるじゃないですか。そうするといじめの対象になるかもしれない。そういうのを恐れて授業ができないって言うんですよ。確かに原因企業だっていうのは消せないんだけど、私なんかは、元従業員のおじいちゃんだって、その当時の鹿瀬町の様子とか、工場の様子とかについて生の声を聞かせてくれる貴重な人材だと思うんですよ。「うちのじいちゃんは昭和電工で、こんなことがあったんだよね」みたいな。町の誇りって言うかな、そういう企業が来るっていうのは、いろんな自然的な要素もあるけど、あそこに昭和電工が存在したことは必然性というのもあるわけだから。昭電ができてこんなに村が繁栄した時代があったんだよっていう、そういう誇らしい時期の鹿瀬町を子どもたちに知らせるのも私たち大人のひとつの役目なんじゃないかなと思う。そういう授業展開をと言ってみたりもします。実際に地域に入れば私もできないかもしれないけど。

私は幸運だったのかわからんけど、周りにも患者さんがたくさんいたし、生の声を聞いてるんで、新潟水俣病はやっぱり避けて通れないですよ。生まれた場所がそういう水俣病のあった場所なんで。でも、私のやってることも、もっと深く関わった人から見れば、不十分なことはいっぱいあると思うんだ。でも、まずやらないと。やらないうちから、駄目だろうとか、頭の中で考えていても始まらない。まずやってみてどういう反応があるか。それが現場では大事だと思う。

いまの教育に思うこと

新潟水俣病の授業も、他の教科と同じように考えてくれればいいのに、と思います。たとえば先進的な国語の教材での授業とかはみんな興味関心あって見に行くじゃないですか。

私は小学校の教員だから、いろんな教科の授業をします。今なんか国語だと鳥獣戯画図の題材で授業をやってるんだけど、現物を見に行ったりします。屋久島の千年杉が題材になった国語の教材があるんだけど、そんなのを見ると屋久杉を見に行きたくなりますし。実際に見ないと、やっぱり授業なんかできないですよ。感動を伝えられない。社会科も同じで、教師が現場に出て、患者さんと触れ合っていないと、子どもには絶対伝わらないだろうし、いくら忙しくても教員はそういうことをやらなきゃいけない。

社会科で教科書を見せて、庄内平野っていうのはこんなに田んぼが広いんだよとか、こんなに青々としてとか言っているんですが、「いや、見たんか」「見に行ったんかい」と思いますね。

下手でも写真を撮ってきて子どもに提示するだけで全然違うじゃないですか。「先生行ってきたんだ！」「おお、行ってきたんだよ、暑くてねー」とか言って伝えられるじゃないですか。そういうことを言うと「今は古い」とみんなから言われるんですよ。インターネットとパソコンで授業をする時代だから。みんなバーチャルで体験をするんだけど、バーチャルでは限界がある。

いっぱい教科書会社がありますが、教科書会社ごとに公害の単元でも取り上げる地域が違ってきます。自分の地域に合わなければ、まずは地元を見渡さないとダメですね。それが大きい公害問題でなくても、身近な問題でもいいじゃないですか。近くの川で最近生き物が住まなくなったみたいなことであれば、「なぜなんだろう」と考えるとっかかりになりますよね。教科書って万人受けするために理想的な事が書いてあって、小学校は特に高学年の理科とか社会では、グローバルな地球環境を扱ってるんです。6年生の理科の最終の単元だったかな、ちょっとあやふやですけど、要するに地球船宇宙号みたいな形で考えましょう、というような。温暖化とか砂漠化とかすごくページを割いて取り

上げているんですよ。その視点は大事なんだけど、6年生に「地球温暖化防止のために何をやりますか」なんて聞いたってできるわけじゃないですか。私は「子どもには何ができるか」ということを大切にしたい。考えるよりも何かできた方が実際のじゃないですか。実践力というか。子どもってというのはそうなんですよ。

熊本の水俣市に行って子どものゴミ分別を見ると、20種類ぐらいに分別するんです。牛乳を飲むときも牛乳パック、牛乳のストローが入ってる袋、ストローとに分別するんですよ。パックはパックでいいんですけど、ストローの入ってる袋はプラスチックで、ストローは廃プラとまた違うんですって。それをもう平然とやるんですよ。それは無意識で子どもにもできるじゃないですか。なぜ分別するかを子どもらは知ってるわけですよ。その背景には水俣病という大きな事件があって、水俣市全体が取り組んで、自分たちも分別に取り組む。

そして自分でも、歯を磨くのはコップ一杯の水のように、目標設定をするんですよ。子どもができることをベースにして環境教育はできる。理想的なのは、学校独自の環境教育を指導計画の中に入れて実践するのが一番なんです。でも、5年生の社会科の公害単元っていうのは、だいたい教科書読んで終わり。「はい、読むよ」「読んで」。つまらない最悪の授業ですよ。でも、教員は時間がないから。「後で読んどいて」とかもよくやるじゃないですか。別のことに時間いっぱい割いてね。聖徳太子がどうしたとか。縄文時代がどうしたとか。

公立校の教員は公務員ですから、文科省があって、県の教育委員会があって、市の教育委員会があって、そして学校がある。それを逸脱してしまうと上から言われるので、ギリギリをやるっていうのがミソなんです。真ん中を通っちゃうとおもしろくないでしょ。文科省のいうとおりでとおもしろくないじゃないですか。だからもっと冷静に考えてギリギリの、何かあった時にすぐ逃げられるギリギリをやるのが一番。ふぐでも毒の一番ギリギリのところは美味しいって言うじゃないですか。それと同じで、ギリギリが一番おもしろい。

あの人も、その人も患者さんだった

患者さんは私たちと真逆の話をするとしますよ。それこそもう隣同士でも差別があって、それこそ村八分みたいな除け者扱いみたいな感じにされて、辛い思いをしているんです。「この家は水俣でいい家建てたんだ」とか、「あそこは何千万ももらったんだ」とか、未だに年寄りも平気でお茶の間の話で言ってますからね。

でも大学に入る前は、患者さんがいるとか、あの方は患者さんだとか、生活の中に新潟水俣病があったという記憶は皆無です。高校まで授業で水俣病の「み」の字もなかった。大学に入って初めて水俣病に触れました。

水俣病は本当に見えないです。部落解放の被差別部落の問題も、新潟では全く知らなかった。大学で年にいっぺん、必ず受けなきゃいけないのが同和教育でした。「なんでだろう」と思いました。京都では「部落問題」と言う。でも、新潟のこの地域では、集落のことを平気で「部落」と言うんですよ。今でも年寄りは、「部落」と平気で言ってますよ。でも関西の人たちとか関係者が聞いたら「うん？」って思うじゃないですか。でもそんなこと大学に行って新潟の外に出て時代背景とか事実を始めて知るんですよ。水俣病もしかりです。

水俣病患者が誰なのかというのも後から分かってきました。こっちに帰ってきてね。旗野秀人さんという存在も、大学に行ってから初めて知った。実は彼から私の方へコンタクトがあったんですよ。でもその時は、旗野秀人さんを遠ざけたんですよ。関わりたくないって。住民運動みたいな形で、患者さんの救済とか色々している人に、当時の私はそこまで問題意識がなかったの、関わりたくないと関係を切った時期があった。

それが、ふと周り見ると本当に「あ、俺が子どもの時に行っていた駄菓子屋のおばあちゃんは実は水俣病患者だったんだ」とか、「家によくお茶を飲みに来る人が患者さんだったんだ」というのがわかってくるわけですよ。私も子どものころに阿賀野川に魚釣りへ行ったら魚を食べたりしていたのに、こんな身近なところにあった問題をなんで知らなかったのか。そういうことが、あまりにも地元すぎて見えてなかったんです。秀人さんは、個人レベルでも患者さんの救済に力を注いでいて、すごい人なんだと思いますよね。後で知ったことだけど、自分の同級生の親が新潟水俣病だったりとか、私が生まれた旧安田町っていうのは水俣病に認定されなかった方達がすごく多い地域です。

子どものころ暮らし

うちの親父は魚釣りが趣味でしたが、食卓に川魚が並んだのは鮎ぐらいのもんだね。鮎は水銀の影響が少ない魚だから。私も川魚が嫌いな人間だったので、ほとんど川魚を食べない。川魚を食べていたのは、川の本当に近くで川魚が食生活に密着していた人達だけです。

そうは言っても私の家も阿賀野川から直線距離で言うと1kmもない、500mから700mぐらいで阿賀野川に行けるんで、子どもの頃に川遊びと言えば阿賀野川でした。当時からこの辺で阿賀野川を「大川」と呼んでました。大川は遊んじゃいけない場所、泳いでもいけない場所でした。でもプールがない時代だったから、泳ぐといえば用水とか川だった。阿賀野川は危ないから泳いじゃいけないんだけど、当然泳ぎに行きました。決まりを破るのが小学生でしょ。川船なんか浮かんでると、乗っちゃいけないんですけども乗りますよね、小学生なんだから。そうすると結んでいる紐が緩んだりして流れていくでしょう。そうするとまた持ち主に怒られますよね、そんな当たり前の光景がありました。

そんな風に遊んできたんだけど、(川魚を)食べてはいけないんだよね。土手下の人たちはしょっちゅう魚を取って食べていました。それがタンパク源なので。私らは食べませんでしたね。新潟の方から海魚の行商が売りにきていたらしいですけどね。うちの両親は公務員だったので、まあまあその当時はいい生活ができたというかね。川の魚を直にとって食べなくても、お店屋さんとか魚屋さんとかから買えるような環境だった。だから本当にね、地元において水俣病を密接に考えてきたとかそういうのはなかったんです。だから人に教えられるっていう不思議な感じですね。

ふれあい館の教育への活用

泉田知事が施策とか方針を出してから、環境と人間のふれあい館でも職員研修をするようになりました。先生方が環境とか人権とかの研修をやるために、ふれあい館を利用する割合がどんどん増えてきたんですね。表向きはいいんですけど、ここに来れば学校は何もしなくていいんですよ。語り部さんいるし、案内してもらえるし、映像も見れる。半日ここで過ごせば、環境に関する研修は終わりにできます。先生達は研修に参加すれば、どれぐらい理解しているかまいが研修が終わるんですよ。一コマで終わりです。ここに来るのが一番楽なんですけど、ここにすら来ない学校もあります。存在すら知らない人もいっぱいいます。教員でこれはまずいのですが、そんな感じですね。学校利用数も2009年から2桁になっていますが、これが年間のべ回数ですね。ひとつの学校が年に2回も3回も来る場合もあります。私も自転車でもここに連れてこれる距離にある学校にいた時には、子ども達を連れて5、6回来ていました。それもカウントされてしまうので、合計で3桁に行くということは考えられますね。

ふれあい館の学校利用について、一番のネックになっているのは、見学に来るためのバス代なんですよ。学校というのはとにかく金がないんですよ。ここへ子どもたちが来るというのは、校外学習ということでバスを利用するわけですよ。各市が持っているバスを使うこともできるんですけど、民間のバス会社のバスを借りてくるとなると、近くの市町村から来るだけでも1万円以上バス代がかかる。校外学習というのは社会科だけじゃなくて、他の教科でもいろんなところに行くんですよ。年間の交通費というのは上限が決まっています、ここまで来れないという学校があるのは事実なんですよ。金銭的な問題も非常に大きな要因になっています。要請があると語り部さんを連れて、学校に出向いていくというシステムもつくっているんですけど、それでも呼ばない学校、来ない学校、この場所すら知らない学校がある。現場に行かないと分からないことっていっぱいあるので、現地で学ぶ重要性というのを痛感しています。できることなら、阿賀町も、現地学習で子ども達に見せると捉え方や感じ方がまた変わってくると思うんですけどね。そこまではなおさら行けない厳しい面があります。

被害と加害を超えた教育を

これからは、次世代に何か新しいものを求めるというより、新潟水俣病が存在したということを押さえておかなきゃいけないことです。いまも裁判は継続中だし、患者さんは生きてるし、決して昔のことではないということを押さえないといけない。

「昔、こんなことがあったんだよ」と過去形にしちゃいけない。その辺をやっぱり最低限押さえるのが、大人の使命ですよ。それは伝えていかなければいけないことだし、それを語り継ぐ語り部さんとなると、熊本水俣病はもう次世代の子どもさんたちが語り部になってるじゃないですか。新潟は語り部としてはまだその形がないんです。いくら映像で語り継いだとしても、生の人間の声を聞いて、子どもが子どもなりの立場でそれをどう捉えていくかはまた大事な視点です。熊本のような状況が新潟でも生まれればいいのかと思いますね。なかなか手をあげて名乗ってくれる人はいないと思うんですが。

だからね、子どもたちに何を願うかなんておこがましいことは言えないんだけど、我々の世代がどう水俣病を受け

止めて、どう考えて行くかによって、子どもたちの捉え方が変わってくると思うので、やっぱり知識や体験の継承を切らしてしまうと良くないですね。

私の座右の銘

最後に、私が座右の銘にして大切にしないではいけないと思っている言葉をお伝えしたいです。原田正純先生⁷⁰という熊本のお医者さんがいらっしゃったんですけど、その方が常々言っていた言葉なんですけど。

「地球規模で考え、足元から行動しなさい」という言葉ですね。小学校5年生の子に地球環境を破壊しないためには何をすればいいか考えられないですよ。でも自分の出来る事はありますよね、水を節約するとか、先に述べたように水俣市の例で考えれば、コップ一杯だけの水で歯磨きをやると目標を立てている。できることをすることが大事だよというのを教えてくれる言葉だと思います。



70 原田正純（1934-2012年）は、熊本大学医学部で水俣病を研究し、胎児性水俣病患者の存在を明らかにした。患者の立場から徹底した診断と研究を行う。著書に『水俣病』（岩波書店、1972年）、『水俣病は終わっていない』（岩波書店、1985年）をはじめ多数。